
勝利の女神を喚び出せば

ナリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勝利の女神を喚び出せば

【著者名】

ナリ

N5856N

【あらすじ】

いきなり召喚されました。と思つたら失敗?え? 用無し?

召喚ファンタジーのような、おっさんとの恋愛話のよつな。(

中編予定)

事の始まりはこゝだ。

上司から仕事の呼び出しを受け、急いで家を出た瞬間、ぐんと体が下に引っ張られるような感覚がした。
そしてハツと気づいた時には、私は見知らぬ場所で、見知らぬ人々に囲まれていたのだ。

後で分かる事だけど、その時私はクロッカという國のお城の広間に召喚されていたらしい。周りにいる人たちは、王様や大臣といった偉い人と、彼らを守る兵士たちだった。

「おお、本当に成功した」
「召喚が成功したぞ！」

大臣っぽいお爺ちゃんたちが興奮気味にささやく。
突然違う世界へ来て呆然としていた私だが、瞳だけはせわしなく動かして、自分の置かれた状況をなんとか把握しようとしていた。

私の足元には召喚陣らしきものが描かれており、正面を見上げれば、玉座に座つた王様がこっちを讶しげに見つめている。

「我らの呼びかけに、アプロディー様が応じて下さつた」

感動したように言つお爺ちゃんたちの言葉を、王様がさえぎる。

「待て。こんな小娘がアプロディー様とは思えん」

『小娘』だと?
私はむつと顔をしかめた。

「おい、お前」

不遜な態度で王が言つ。まだ年も若く、金髪碧眼のイケメン王だけ、こちらを見下しているような口調や表情がいちいちカッコに触る。

人の性格というのは、結構しぐさや雰囲気に出るものだ。この王様からは高慢で自己中な匂いしかしない。

「お前は本当に”勝利の女神” アプロディーテか?」

その質問に、私は目を丸くした。

勝利の女神アプロディーテ?え、誰が?

きょろきょろと周りを見回しても、広間の中心には私しかいない。王様の視線もしっかりとこちらに向けられていて……

私が勝利の女神? まさか!

「女神だなんてめつそうもない。私はそんな崇高な存在ではないです」

慌てて否定する。訳の分からぬまま召喚されたかと思えば、女神に間違われるなんて。

「お前はアプロディーテではない?」「はい、違います」

再度、王様から問われて、私は大きくなづいた。

すると今度は、彼の眉間に深いしわが刻まれる。片眉をつり上げて私の一番近くにいた中年のおじさんを睨みつけると、

「貴様、失敗したな？　ただの人間の小娘を召喚して、どうして戦争に勝てるというのだ。私は勝利の女神を呼び出せと言つたはずだ。隣国シロルとの戦争に勝てるように、勝利の女神を呼び出せとな」

冷たい口調で責めた。責められたおじさんは顔を青くしながら言う。

「し、しかし陛下……私も召喚術などといつものを使うのは初めての事ですし……」

彼の弱々しい言い訳を聞いていくと、どうやら召喚術というのは、この世界でも特にポピュラーな術ではないらしいという事が分かった。

なんでも最近見つかった五百年前の文献の中に『勝利の女神を呼び出して戦争に勝利した』といつ記述とともに、召喚のやり方が書いてあつたのだとか。

そしてそれを見た王様が、「やつてみせろ」と陛下のおじさんにムチャぶりしたようだ。そりや無理だよ。

尋常じゃない冷や汗を流しながら言い訳を続けるおじさんを見て、私は少なからず同情の念を覚えた。

召喚術なんて本当にできるかどうかも分からぬものだったんだから、私を喰べただけでも褒めてしかるべきじゃないか。

ただのおじさんが召喚術使ったんだよ。すじこよ、このおじさんは。

しかしそこで、私はハツと我に返つた。

見知らぬおじさんに同情している場合ぢゃない。本当に可哀想なのは、その召喚に巻き込まれた私ではないか、と。

何だか急に怒りが込み上げてきて、思わず王様に「私を元の世界に帰してください」と詰め寄つとした時だった。

「どうかお許しを、どうか……『やあ あああ…』」

野太い悲鳴が耳を突く。

真っ赤な血しぶきが、私の視界を汚した。

「失敗は失敗だ。使えぬ家来などいらん」

辛辣に吐き捨てる。私の目の前で、おじさんはすでに息絶えていた。

王様から命令を受けた兵士が、召喚に失敗したおじさんを容赦なく斬り捨てたのだ。

恐怖のあまり叫び出しそうになつたが、喉がつかえて声が出ない。体から血の氣が引いていく。

どうしよう。私、とんでもないところに来てしまった。ここは私がいた平和な世界とは違うのだ。

今更ながらそう実感して、細かく体が震え出した。

「さて、では、勝利の女神でもなんでもないお前をどうするか

玉座の王が氷のような瞳で私を見下ろし、言つた。

勝利の女神アプロティーネと間違われて召喚され、このクロッカ国にやつて来てから3ヶ月。

私は一応、まだ生きてます。

私を呼び出したおじさんは殺されちゃったし、元の世界に帰ることもできないまま、お城の片隅でひっそりと日々を過ごしてきたのだ。

不遜な王様とは、あの時以来会っていない。会いたくもないけど。

うわさでは、王はもう召喚術で女神様を呼び出すのは諦めたようだつた。大昔の文献に載つていただけの不確かな術だつたし、それに時間をかけていられないと思つたんだろう。

まだ本格化していないとはいえ、このクロッカ国は今、隣国のシリルと戦争中なのだから。

「夕食をお持ちしました」

静かな声とともに扉が開く。料理の乗つたカートを押して、ひとりの侍女さんが部屋の中に入ってきた。

私はあの王様に殺されはしなかつたし、一応この城の中に置いてもらえているけれど、特別に良い待遇を受けているわけでもない。

私にあてがわれた部屋は城の中の一室だけあって広いものの、簡素なベッドとテーブル、椅子があるだけの寂しい部屋だった。北側にあるのか日が入らず、昼間も薄暗くて、ちょっと素敵な監獄みたいなのだ。

何度か挑戦してみたけれど、扉の外には見張りの兵士がついて逃げ出すこともできない。

私はため息をついて椅子に座り、テーブルに乗せられていく料理を眺めた。城で働く使用人たちの食事とほとんど変わらないと思われる、つつましいメニューだ。まあ、ごはん貰えるだけマシかな。

この城の人たちは、私の処遇を考えあぐねているようだつた。“勝利の女神アプロディーテ”でないなら用はないけど、召喚術のことをペラペラ喋られても困るので、簡単に城の外に放り出す事もできなのだろう。

それに大臣などの偉い人の中には、『召喚術で出てきたのだから、やっぱり”勝利の女神”としての資質はあるのでは?』と期待している人もいるみたいだつた。

この3ヶ月で色々やらされたもんなー。

私に軍師としての才能もあると思ったのだろうか、地図を広げられて「どう戦つたら勝てるか」などと戦略を聞かれたり、戦に勝てるような方角や時期を占つてみると言われたり、あげくの果てには剣を持たされて、兵士たちの訓練に放り込まれたり。

だけど私には戦術の事はさっぱり分からぬし、占いだってできない。もちろん敵を百人も千人も斬つて、この国を勝利に導けるほどの剣術も体力も運動神経もない。

ここへ来るまで、私は平和な世界で戦争とはかけ離れた生活を送っていたのだから当たり前だ。

「大丈夫ですか？」

食事を運んできてくれた侍女 マリンさんが、うつむいていた私の顔をそっと覗き込んで言った。

心配をかけてはいけないと、私は笑顔を作る。

「大丈夫です、考え方してただけなので。ありがとう」「食事、全部召し上がりくださいね。体力をつけないと」

マリンさんは優しく言って、部屋を出ていった。私の世話をしてくれる侍女さんは3人いて、交代で食事の用意やら部屋の掃除やらをしてくれたのだが、マリンさんは何かと私のことを気にかけてくれる。

私が他の世界から間違つて召喚されたという事を知つていて、不憫に思つてくれているのだ。

ちなみに他の侍女さん2人は何だかツンとした雰囲気で、用事がある限りは話しかけてこない。

マリンさんがいてくれたおかげで、私はこの3ヶ月何とかやってこれた。彼女の優しさに触れていたから、見知らぬ土地で独りぼっちでも精神をまともに保ってきたのかも。

なんたつてこの城にいる人々は、あの独裁的な王様をはじめ、自分たちの保身に必死な大臣たちなど、自己中心的な人が多いから。私が会話した事あるのはこの城にいる一部の人だけだが、権力を持っている人ほど、性根の曲がった嫌な人が多かつた気がする。

そしてそんな腐った人たちの手に、私の命運も握られているのだ。薄味の食事を黙々と口に運びながら、どうにかしてここから逃げられないかと思案した。

よくも悪くも事態が動いたのは、それから1週間後の事だつた。

昼食を食べた後、する事もなくぼーっとしていると、ノックも無くいきなり部屋の扉が開いた。ドカドカと床を踏み鳴らして入ってきたのは、王様と彼を守る近衛兵、そして大臣たちだ。

「な、なんですか？」

私は椅子から立ち上がり、身構えた。

最近毎日のように脱走しては見張りの兵士に見つかって連れ戻されてるから、いい加減、王様の方にも報告が上がったのかもしれない。

王様は尊大な態度で言った。

「お前の処遇が決まつた」

その言葉に、私の背筋がひやりと凍る。

もうそろそろ来る頃だと思っていた。この3ヶ月で色々やらされ、私が勝利の女神でないことは裏づけられたから、正式に用無しになつたのだ。

そしてその用無しをいつまでも城に置いておくほど、この王様は甘くない。

「アプロディーテではないお前に、もはや存在価値はない。……これを受け取れ」

王のふところから取り出され、一いちょうに投げられたのは、紫の液体が入つたガラスの小瓶だった。

「なんです、これ？」

顔をしかめて言つ。

答えは何となく分かつっていたけど。

王様はフツと口角をつり上げて笑つた。

「毒だ。それを飲んでさつさと死ね。言つておぐが、これは私の慈悲だぞ。その毒はゆづくつと体に作用し、眠るように死んでいける。苦痛を伴わずにな」

手の中の毒薬が、ずんと重みを増した気がした。

王様は続ける。

「普通なら問答無用で斬り殺すところだが、お前は我々の召喚に巻き込まれただけだしな。これくらいの情けはかけてやるうつかと思つたのだ」

田の前にいる王様が、どうしてこんなに横柄な態度をとつているのか分からぬ。

相手の事を責めて、許すか許さないかを決める権利を持つているのは、私の方だと思っていたんだけど。

だつて召喚なんて言つて、やつてゐことは誘拐と同じじゃないか。おまけにそれに対して謝罪もせずに、用が無いから死ねだなんて。こんな理不尽なことってない。

私はわざとゆづくつとした動きで、小瓶を握つた手を上げた。腕を伸ばし、王様に向かつて拳を掲げる。

王様に大臣に兵士たち、この部屋にいる全員の視線を感じながら、私は握り込んでいた指を広げた。

「いんな毒は必要ありません。私、死ぬつもりなんてないの」

毒薬の入った小瓶は私の手から滑り落ちて石の床にぶつかり、パリンと高い音をたてて割れた。紫の液体がとろりと広がっていく。

王様は一瞬目を見開いた後、口元を引きつらせながら笑つて言った。

「そりゃ、毒は必要ないか」

と、そこでぐんと声を低くする。

「ならば痛みにうめいて死ね」

王様がぱちんと指を鳴らすと、隣に控えていた兵士のひとりが静かに歩み出てきた。腰の剣に手をかけて、私の方に近づいてくる。私がこの鍛えられた兵士に勝てるなんて思っていない。だけどまだ死にたくないから、みつともなく抵抗してやる。

今まで誰かを殴った事なんてない私だが、今は妙に闘志に燃えていた。アドレナリンが出てハイになつていいのだろうか、あわよくば王様の顔面に1発ぶち込むぞ、と物騒な事まで考えていた。

すらりと剣を抜いた兵士を、ぎろりと睨み上げる。視界の端で王様がニヤニヤと笑つているのが気に触る。

私が動物だつたら、きっと今、毛を逆立たせてうなり声をあげているに違いない。

おかしいな。私はこういう時、可愛く震えて涙をこぼすよくなきヤラだと自分で思つてたんだけど。

兵士が剣を振り上げて床を蹴る。私は目をつぶらなかつた。だつ

てそんな事したら、剣を避ける事ができなくなるじゃないか。

が、剣は私に届く前に止まってしまった。
キンと高い音が部屋に響く。

「……！」

私は目を丸くして固まった。
だつて私と、私を襲おうとした兵士との間に、いきなり第3者が
立ちはだかったのだから。

「お嬢さん、意外と気が強いねえ」

私をかばつて剣を抜き、兵士の攻撃をやえぎつたのは、

「ま。おじさん、そういう子好きだけど」

やけにのんびりとした空気をもとつた近衛兵のひとりだった。歳
は30代後半くらいで、私にとっては確かにちょっとだけおじさん
だ。

しかし今はそんな事どうでもいい。彼も他の兵士たちと同じく、
王様側の人間のはず。

なのにどうして私をかばつたんだろう。

「何のつもりだ、グルド」

王様が冷えた声で言つた。苛立つてゐるのか、こめかみがピクピクと痙攣している。

私を助けた近衛兵 グルドさんは、すつと目を細めて笑つた。

「いやあ、彼女が殺されなきやならない理由が見つからなかつたもんで」

口調は柔らかだが、その声は低く、迫力があった。私をかばうよう立つてゐる彼は、背が高く筋肉質で、ゆるいくせ毛が特徴の黒髪だ。

この人の事は今まで何度も何度か見たことがある気がする。自分の身を守るために、近衛兵を常にそばに置いていた王様だから、私が召喚された時にも、あの広間にいただろう。

もしかして剣の才能があるのではないか、と私が兵士たちの訓練に放り込まれた時にも会つていたと思う。上官なのか、若い兵士たちを指導していたはずだ。

だけど、今まで何度も顔を合わせていても、彼は私に興味のあるそぶり、あるいは同情しているようなそぶりなんて見せなかつたのに。

なのだからして今、じつやつて助けてくれたのだろう。

王様の命令を受けて私を襲おつとした兵士は、グルドさんの妨害を受けて数歩下がつた。グルドさんは剣を構えたまま、堂々とした

態度で王様と向かい合つ。

「望んでもないのに召喚されて、知らない人間だらけのこの国にやつて来たのに、勝利の女神じゃないなら用無しだと切り捨てられるなんて、あんまりだと思いまして。あんたらが謝罪する必要はあっても、彼女が死ぬ必要はないでしょうよ。今まで黙つて見てましたけど、今回は口を出させてもらいますよ」

逆らわれたことが気に食わないのか、王様は厳しい顔つきでグルドさんを睨んでいた。他の兵士や大臣たちは、「なんて馬鹿な事をするんだ」という表情をして、自分たちにとばっちりが来ないかと怯えている。

私も自分の事を差し置いて、「この人こんな事して、これからどうするつもりなんだろ?」とグルドさんの心配をしていた。この王様に楯ついて、無事でいられるとは思えない。

「グルド、貴様がそんなに馬鹿な奴だとは知らなかつた。お前はいつもから私に説教できるほど偉くなつたんだ? そんなに死にたいのなら、その小娘もろとも殺してやろう」

王様の言葉を受けて、部屋にいた10人ほどの兵士たちが一斉に剣を抜いた。大臣たちは慌てて隅の方へ後退していく。

じりじりと近づいてくる兵士たちを牽制するように、グルドさんが剣を握り直した。

「私の近衛兵に採用したくらいだからな、お前が強いのはよく知っている。しかしさすがのお前でも、10人の兵士を相手にするのは厳しいのではないか?」

王様がしたり顔で笑うと、グルドさんも困ったように笑つた。

「まあ、そうですね。10人はきついなあ」

認めるなよ！

私は心中でつっこんだ。セイは嘘でも余裕だと黙つてしまい。
王様はさらに笑みを深める。

「もしお前とその小娘が私への非礼を詫びるといつのなら、命だけ
は助けてやらんでもないぞ。床に頭をこすりつけて土下座し、私の
靴を舐めてみせろ！」

そう言つて、王様は自分の右足を一步前に出した。
グルドさんはゆるくほほ笑んで、後ろにいる私に声をかけてくる。

「どうする、お嬢さん。靴を舐めて許しを請つか、反抗しておじさんと一緒にここから逃げるか？」

「おじさんと逃げます」

速攻で答えると、グルドさんはフツと笑つて剣を鞘に収めた。

「よひしー」

これからこの兵士たちを倒して逃げなきやならないのに、どうして剣を仕舞うの？

私がそんな事を思つていると、グルドさんは敵の兵士たちに背を
向け、素早くこちらに走りよってきた。その勢いを落とさぬまま私
のお腹に腕を巻きつけ、抱き上げる。

「あやあー！」

肩の上に乗せられて、視界が反転した。

何だ、何だ？？ 私を抱えてどうやって逃げるつもり？

私が混乱している間にも、グルドさんは動きを止めなかつた。人ひとり抱えているとは思えないくらい俊敏に、兵士や王様がいるのは反対の方へ部屋の中を駆けていく。

ちょっと待つて。そっちにあるのは……

「逃がすな！」

後ろで王様が叫ぶ。兵士たちの足音が近づいてきた。

グルドさんの目の前にあるのは大きな窓。この国では窓は基本的に開いたままで、雨が振った時や夜の間だけ木戸を閉めておくのだ。つまり、太陽が眩しい真っ昼間の今、窓は開放的に開け放たれていて

「……3階———つ……！」

悲鳴の代わりにそう叫びながら、私はグルドさんに抱えられたまま窓から飛び出していた。

死ぬ、死ぬ！ 地面に体ぶつけて死んでしまう！

グルドさんの服をぎゅっと握つた。全身に強い風を受けて、胃がひっくり返るような感覚がする。

かと思うと、次の瞬間にはもう、私たちは地面に着地していた。

正確に言えば、枝をバキバキに折りながら庭の低木の上に落つっていた。

「いたたた

落ちた衝撃で頭がくらぐりする。しかしごいも怪我はしていない。
骨も折れてないし。

クッシュョンになつてくれた低木のおかげか、と、体を起こすと、
私の下に倒れていたグルドさんと目が合つた。
あ……。クッシュョンになつてくれたのは低木だけではなかつたら
しい。

「だ、大丈夫ですか？」
「ん、ダイジョブ」

心配したけれど、グルドさんも特に怪我は無いようだつた。服に
ついた葉っぱを払いながらゆっくりと体を起こす。

上を見上げると、3階の窓から兵士たちがこぢりを覗き込んでい
た。追わなきやならないけど落ちるのは嫌だし、といった感じで迷
つてている。

「すぐに追えッ！　早くしろ、グズズどもッ！」

と、その窓の奥から王様の怒鳴り声が聞こえた。逃げられた怒り
と焦りがにじんでいる。

べーだ、ぞまあみろー！
私が窓の方に向かつて舌を出していると、

「可愛いけど、今はまだその舌仕舞つときなさい。完全に逃げ切る
までは安心しちゃダメだよ」

グルドさんは私の腕を掴んでまた走り出した。足を動かしつつ、
指をくわえてペコリーと笛を鳴らす彼を、「何してるんだろ？」「

と思いつつ見つめる。

今私は、裾がすねの辺りまであるドレスを着ていた。普段着用のものらしいけど、ドレスなんて着慣れない私には動きにくくて仕方がない。元の世界ではもう少し身軽な恰好をしていたのだから。靴はヒールのあるブーツだし、このまま走つて逃げるのは無理がある。

「グルードさん!」「一田どこかに隠れませんか?」と提案しようとしました時だった。

「からか荒々しいひづめの音が響いてきたかと思つたし、突如として、目の前に大きな黒い馬が飛び出してきたのだ。グルードさんがさつき鳴らした笛笛は、この馬を呼ぶためのものだつたらしい。」

「馬に乗つたことは?」

「ありません!」

走つて馬に近づきながら言ひ。

「分かつた、前に乗つて」

グルードさんは自分が馬に乗つた後で、私を鞍の上に弓を上げてくれた。

うわわ、馬の上つて結構高い。

「いたぞ!」

城から出てきた兵士たちが、剣を手にひきりへ駆けてくる。

「鞍を掴め」

グルドさんは私にそう言いながら、自分は手綱を握つて、馬の腹を蹴つた。

「待て！」

人の足では馬には勝てない。走り出した私たちと兵士たちとの距離はどんどんと開いていく。

「開けろー。」

突然、グルドさんが前に向かつて叫んだ。そこには侵入者を防ぐ大きな門と、それを守る警備兵たちがいたのだ。

「え、あ、近衛の……」

警備兵の何人かは、グルドさんの顔に見覚えがあつたようだ。

「急げ！」

「は、はい！」

グルドさんの迫力ある声に急かされて、警備兵は慌てて門を押し開けた。彼らはグルドさんと私が王様に逆らつたことなんて知らないもんな。

「開けるなー！」

追つて來た兵士たちが後ろで叫んでいるが、もう遅い。

私たちが乗つた黒毛の馬は、すでに門の外へと飛び出していた。

城を出てからずつと、グルドさんが馬の速度を緩めることはなかつた。結構お尻が痛いんだけど、いつ追つ手に見つかるかも分からぬ状況で「ちょっと休みたいです」なんて言えるわけもなく。グルドさんも私のお尻事情に気づいているようだつたけど、

「なるべく城から離れたいんだ。もうちょっと我慢してくれ」

と励まされた。

大丈夫。見つかって殺されるのは嫌だし、お尻の痛みくらい我慢します。

というか今はそれよりも、グルドさんとの密着具合のが気になつたりして。

逃亡中にこんなこと考えるのもなんだけど、落馬しないようにとグルドさんは片腕を私のお腹に回しているので、後ろから抱きしめられているような感じがして恥ずかしいのだ。

私は今まで、異性とこんなに近づいたことなどなかつた。元の世界でも女性と接することの方が圧倒的に多かつたし。

グルドさんと密着している背中が熱くてたまらない。心臓が爆発しそうだ。

「大丈夫か？」

鞍を掴んでうつむいていたら、グルドさんが私の耳元にそっと唇を寄せてささやいた。

「だ、大丈夫ですっ！」

慌てて顔を上げたせいで、私の頭がグルドさんのあいりヒットする。

「痛い……」

「すいません、ごめんなさい！」

顔を赤くしながら、あわあわと謝罪する。

「石頭だねえ……えっと、そういう名前を聞いてなかつたな」

グルドさんは片手で手綱を握りながら、彼のあじとぶつかつた私の頭を撫でてくれた。
優しいな、この人。

「あ、私チノと言います」

「チノちゃんか、やっぱり珍しい名前だな。聞き慣れない響きだ。チノちゃんはこことは別の世界に住んでいたんだろう？」

「ええ、そうです。ここよりずっと平和で穏やかなところです」

質問に答えながら、自分がいた世界を思い浮かべて泣きそうになつた。優しい友達、尊敬する母、彼女たちにはもう会えないのかな。暗く沈みそうになる思考を、今は悲嘆にくれている場合じゃないと切り替えて、話題を変えた。

「これから私たちどうすればいいんでしょう、グルドさんは今、どこへ向かって馬を走らせていい……ッ！」

痛いっ！ 舌噛んだ！

馬に乗りながら喋るのは危険だ。

そんな私を見て、グルドさんは笑う。

「気をつけて。行く当てはあるよ。詳しいことは馬を降りてから話そうか」

それからしばらく、私たちは黙つたまま走り続けた。私は背後のグルドさんの体温にドギマギしつつ、通り過ぎていくこの国の景色をじっと眺めていた。

今までずっと城の中にいたから、外の様子は分からなかつたし。

城に近い町は大きく、人通りも多かつたけど、活気はなく静かだつた。みんな暗い顔をしていたのも印象的だ。

城から離れていても町の様子に大きな変化はなく、むしろひどくなつていった。ボロボロの服を着て無氣力な顔をしている人や、やせっぽちの子供たちを何度も見た。

城にいる王様や大臣たちは派手で豪華な衣装を着て、きらびやかな宝飾品をたくさんつけていたのに。

私の世話をしてくれていた侍女のマリンさんに戦争のことを聞いたとき、「この国はいつそ負けてしまった方がいいのかもしけません」と、独り言のように呟いていたことを思い出した。

クロツカ国は立ちいかなくなっているのかもしね。あの王様が頂点にいるのだから、しょうがないとも言えるけど。

クロツカと戦争をしているというシロルはどういう国だろう。クロツカよりは良い国なんだろうか？

日が落ち、辺りが暗くなつてくると、私たちは馬を降りた。本當なら夜通し逃げたいところだけど、灯りなしに走るのは危ないし、馬も休ませなくてはいけないから、ひとけの無い森の中で野宿することになつたのだ。

グルドさんは馬に積んでいた荷物の中から分厚い布を取り出して地面に敷くと、私をその上に座らせた。そして自分も隣に座り、「晩メシだ」と言つてパンとチーズ、リンゴを手渡してきた。

「……」

「食わないのかい？」

ナイフでパンに切れ込みを入れ、チーズを挟みながらグルドさんが言つ。

私は貰つた食材と、馬に積まれていた荷物へ視線をやりながら聞いた。

「なんだか準備万端ですね。グルドさん、最初から私を助けて逃げよつとしてくれてたんですか？」

彼は私のパンを取り、同じよつに切れ込みを入れながらゆるく笑つた。

「チノちゃんが殺されることは昨日の段階で決まつてたからね。別に『絶対助けるぞ!』と思ってた訳じゃないんだけど、まあ、一応準備はしておくかと思つてね。君のことは前から気になつてた。間違つて召喚されるなんて哀れだと」

気づかなかつた。グルドさんが私のこと気にかけてくれてたなん

て。

「何だか少し嬉しくなる。あの城の中には、マロンさんの他の誰も温かな人がいたんだなあ、と。

「グルドさんはパンを私に返しながら言った。

「王の命令によつて罪のない人間が殺されることは今まで何度もあつたし、俺も黙つてそれを見過ごしてきました。今まで殺されたのは皆、クロッカの国民だったからな。形だけでも忠誠を誓つた王に殺されるなら、それもまた運命つてね」

私はパンやリンゴを膝の上に乗せたまま、黙つて話を聞いていた。ランタンの揺れる灯りを受けて、グルドさんの顔は赤く燃えている。「だけど君はこの国の人間じゃないでしょ。『死ね』というあの王の命令に従う義務はない。だから助けた。さつきも言つたように、元直前まで助けるかどうかは迷つてたんだけどね。チノちゃん、毒薬投げ捨てて必死に抗おうとしてたからさ。助けずにはいらんなかつたのよ」

そこまで話を聞いて、そういえば助けてもらつたことにお礼を言つていなかつたと気づき、私は口を開いた。

「ありがとうございます。どんな理由でも、助けてくだせつて嬉しかつたです。グルドさんは私の命の恩人です」

グルドさんは大人っぽい笑みを浮かべて私の頭をぐしゃぐしゃと撫で回すと、持っていたパンにかぶりついた。一口が大きいので一気に半分くらいなくなる。私はその豪快な食べっぷりに目を奪われつつ、自分のパンをかじつた。

「グルドさんは革袋に入った水を飲んだ後で言つた。

「命の恩人だなんて言われると恥縮しちゃうね。俺に命を救われた
なんて思わないでいい。タイミングも良かつたんだよ。実は俺もそ
ろそろあの国を出ようと思つてたところだったから、そのついでに
チノちゃんの事もつれて逃げたとでも思つておいてくれ」

「なぜ国を出ようと……？」

遠慮がちに聞くと、グルドさんは一瞬と笑つて答えた。

「元々クロッカの人間じゃないからさ。俺はシロルの兵士だ。密偵
として、クロッカにもぐり込んでただけのこと」

のんきに言うグルドさんに、私は目を見開いた。

彼はスパイだったのだ。

「もう10年近くはクロッカにいるな。うすとの戦争が始まる前からクロッカ兵になりますまして、内情を探つてた。あの王はとにかく強い奴を自分の周りに置きたがるから、結構簡単に近衛まで出世できたのよ。だが、そろそろ戦争も本格化していくからと、シロルから帰還の命令が出てたし、どのみちひと月以内にはクロッカを出るつもりだった。まあ、その場合はもっとひっそり逃げたけどね」

そう言つて、グルドさんはいたずらっぽく笑つ。

彼はあつという間に自分の分の食事を平らげてしまつたが、私はまだ3口しか進んでいなかつた。少し急ぎ気味にパンをかじり、ほっぺたに詰めこみながら言つ。

「そつか、グルドさんはシロルの国の人だつたんですね。じゃあこれから私たちはシロルへ逃げるんですか？」

私の質問にグルドさんはうなづく。

「やうこつこと。国境を越えてシロルに入れぱどりあえず安心だから、もうちょっと頑張ってくれよ。若い女の子は、こいつやって野宿すんのも辛いだらうけど」

「ううん、大丈夫です。野宿くらい何でもないですから」

「いいコだねえー」

ふにゃつと田尻を下げて、グルドさんがまた私の頭を撫でた。完全に子供扱いされてない？

「私、もう二一歳なんですけど…」

「これは失礼、レディ」

グルドさんはわざとらしく書つと、胸に手を当てておじぎをした。
なんかまともに相手されてない気がする。

馬に乗つてた時も、きっとドキドキしてたのは私だけなんだろう
な。女としては見られてないのかもと考えると、安心なような悲し
いような、微妙な気持ちになつた。

話題を変えよう。

「クロッカとシロルの戦争つて、どっちが勝つと思いますか？」

あの王様や大臣たちの味方はしたくないから、私はクロッカは応
援できないな。もちろん本当は戦争自体しないでほしいけれど、そ
れは私の意志ではどうしようもない。

私が聞くと、グルドさんはあーに手を当て、少し悩んでから答えた。

「シロル兵としては、勝つのはシロルだと言いたいここだね。実際
負けるつもりはないし。だが、客観的にみるなら……んー、五分つ
てどこかな。勝つか負けるかは本当に分からぬ。戦力が均衡して
るんでね」

私はちょっと驚いて言った。

「そりなんですか。あの王様が一番上にいるんだから、クロッカは
大したことないのかと思つてました。逆にシロルには、グルドさん
みたいな優秀な人がいるんだし」

思ったことをそのまま言つと、グルドさんは照れたように頬を搔

いた。

「ま、俺はともかく、確かにシロルには優秀な兵が多いよ。だけどシロルはクロッカに比べると小さい国だからね。比例して人口も、兵の数も少なくなる。クロッカは玉石混淆の軍だが、とにかく人数が多いからな。精銳ばかりでも少數のシロルは苦戦することになりそうだ」

自分がどれだけ平和な世界にいたのか痛感する。戦争が本格化したら、グルドさんも戦いに出るのだろうか。

「もしシロルが勝つたら、クロッカの国民はどうなるんですか？殺したりしないですよね？」

城にいた侍女のマリンさんの顔を思い浮かべた。彼女にも無事に戦争を生き残ってほしい。

「そんなことはしないさ。民間人はもとより、抵抗をやめれば兵士でも殺したりはしない。それにシロルが勝った方が、クロッカの国民も幸せになれると思うけどね。うちの王はここの中王ほど馬鹿じゃないし、今より生活は豊かになるはずだ」

「逆にクロッカが勝つたら？」

「最悪だね。シロル国民の多くが惨殺されると思うよ。俺がいた間にちょっとだけ矯正したけど、基本的にクロッカは兵の教育がなつてないから」

私は顔を歪めた。

「絶対に勝つて下さいね」と訴えると、グルドさんは「そのつもりだ」とほほ笑む。

「それ、もう食わないのか？」

ふと視線を落として、グルドさんが言った。視線の先には、私の
リンゴと食べかけのパン。

実はあまり食欲が無かったのだが、残すのももったいなくて、どうしようかと思っていたのだ。

「あの、お腹いっぱいになつてしまつて……」

「じゃあリンゴはまた明日食つか」

グルドさんはそう言つてリンゴを仕舞つた後で、私が持つていた
パンの残りをひょいとつまみ、

「これは俺が始末しておく」

口に入れた。

「……！」

自分の頬が赤くなつていくのが分かる。グルドさんは何も考えて
いない様子でパンを咀嚼しているけど、それ私の食べさしだよ！？
と動搖してしまう。

これつて間接キスになるのだろうか？ 私がかじつたものなのに、
汚いとか思わないのかな？

嫌いな人に対してはそんな事しないはずだから、グルドさんは私
のこと、食べ残しを食べられるくらいには好意を持つてくれている
？

……考え過ぎ？

とっくにパンを飲み込み、寝る準備を整えているグルドさんの横で、私は一人もんもんとしていた。自分の食べかけを男の人に食べられることが、何でこんなに恥ずかしいんだろう。

グルドさんはもつたいからパンを食べただけなんだ。特にその行為に意味なんてないんだから。と、自分に言い聞かせる。

「おーいチノちゃん、そろそろ寝るよ」

グルドさんは地面に敷いていた厚めの布の上に寝転び、私を呼んだ。体の上にはもう一枚別の布を掛けているのだが、それをペラリと持ち上げて手招きする。

え……？ 隣で寝るの？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5856z/>

勝利の女神を喚び出せば

2011年12月26日21時54分発行